十津川警部「狂気」

新装版

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章　三十年　7
第二章　友情　40
第三章　左手の謎　73
第四章　ヘイトサイト　106
第五章　第三の惨劇　138
第六章　対決　170
第七章　真犯人　201

十津川警部「狂気」

第一章　三十年

1

都内で、立て続けに、陰惨な事件が、起きた。
五月三日、早朝。
ゴールデンウィークの最中に第一の事件が、起きた。
月島に建設中の四十階建の超高層マンションは、現在、二十階までが、外壁が出来あがっていた。
それ以上は、鉄骨が、林立していて、クレーンがゆっくりと動いていた。
この日、五月三日は、作業は休みで、ひっそりと静かだった。
だが、二人のガードマンは、午前六時には、建設現場に、出勤していた。
アルミ合板で、囲まれた建設用地の中に入り、まず、そこに、積み重ねてある鉄板や、鉄骨などの数を確認する。
その途中で、鈴木清の携帯が鳴った。鈴木は、警察を定年退職してから、警備会社で、働いていた。
鈴木は、会社から持たされている携帯をポケットから取り出して、
「はい、R建設ですが」
「何か、ぶら下がっているよ」

と、男の声が、いきなり、いった。
「何ですって？」
「そこは、超高層マンションの建設現場だろう？」
「そうですが」
「上を見てみろよ。何かぶら下がってるぞ」
男は、そういって、電話を切ってしまった。
鈴木は空を見上げた。
同僚の井上が、
「どうしたんだ？」
と、きいた。
「何かぶら下がっているらしいんだ」
「ぶら下がっている？」
井上も、空を見上げた。
二人の視界の中で、巨大なコンクリートの壁と、鉄骨が、そそり立っている。首が、痛くなってくる。
「あれかな？」
と、鈴木が、眼をこらした。
「人形じゃないか」
井上が、呟いた。
二十五階の鉄骨から、何かが、ぶら下がっているのだ。
それは、人形に見えた。
裸の人形だ。逆さに、人形が、吊り下げられているのだ。
「誰がやったのかな。ひどいいたずらだ」
「建設に反対の人間もいるからね」
「今日は、誰もいないし、どうやって、下したらいいんだ？」
二人は、ぶつぶつ、文句をいった。
「とにかく、会社に、電話しよう。当直の社員

ぐらいいるだろう」
と、鈴木が、いい、携帯で、R建設に、連絡をとり始めたとき、ふいに、井上が、
「あっ！」
と、声をあげた。
「どうしたんだ？」
鈴木が、きくが、井上は、黙って、三メートルほど先に敷かれた鉄板の方に、駆け出した。
鉄板の上には、細かい機材が置かれ、白い布が、かぶせてあった。
井上は、その布の一点を見すえ、鈴木を、手招きした。
「何なんだ？」
と、いいながら、鈴木は、傍に寄って行った。
井上は、蒼ざめた顔で、
「これ、血じゃないか？」
と、いった。
白い布の上に、赤いものが、点々と、ついている。
見ている間に、ポツ、ポツと、その赤い点が、増えていく。
鈴木も、顔色が、変って、上を見上げた。
真上に、裸の人形が、ぶら下がっている。
また、赤い点が、増えた。
「人形じゃないんだ！　あれは、人間だ！」
と、井上が、叫んだ。

2

警視庁捜査一課の十津川たちが、駈けつけ、殆ど、同時に、R建設の人間も、現場に着いた。
その男たちが、エレベーターで、二十五階まであがり、鎖で、逆さに吊り下げられていた若

い女の身体を、地上まで、おろした。
　裸の死体は、仰向けに、寝かされた。
　二つの乳房は、ナイフで、傷つけられ、そこから血が、したたり落ちていたのだ。
「年齢二十歳前後。身長一六五センチ。体重五〇キロといったところかな。のどに、圧迫痕がある。殺されたのは、昨夜の午後九時から十一時の間ぐらいだろう」
　と、検死官の中村が、いう。
「身体のところどころに、青あざみたいなものがあるな」
　と、十津川が、いった。
「多分、殴られた痕だろう」
「何処かで見た顔ですね」
　と、亀井刑事が、いった。
「私も、今、それを考えていたんだ」
　と、十津川も、いった。
　首を絞められたために、容貌は、変ってしまっている。それでも、何処かで見た顔なのだ。
「思い出しました！」
　と、亀井が、先に、声をあげた。
「私も、思い出した。確か、捜索願の出ていた女性タレントだろう」
　と、十津川が、いった。
「そうです。名前は、木村ゆきです」
　若い西本刑事は、もっと詳しく、知っていた。
　木村ゆき。二十歳。
　ビールのＣＭで、急に人気が出てきたタレントである。
　最近、写真集も出している。
　ＮＴプロの所属。
　前日、プロダクションから、捜索願が、世田

谷署に出されていた。
ただ、事件にはなっていなかった。NTプロにも、浜松の実家にも、誘拐したという電話は、かかって来ていなかったからである。
NTプロは、もともと、気まぐれな娘だから、会社に連絡せず、友だちと、旅行に出かけたのではないかと、最初は、考えていたらしい。
それが、一週間たっても、出て来ないので、警察に、捜索願を出したのだった。
NTプロの社長と、木村ゆきのマネージャーが飛んできた。
二人とも、変り果てた姿の木村ゆきを見て、言葉を失い、ぼうぜんとしていた。
しばらくして、マネージャーが、
「誰が、こんなことを——」
と、呟いた。
「木村ゆきさんは、一週間前から、行方不明になっていたんでしたね？」
十津川は、確認するように、社長と、マネージャーに、きいた。
「そうです。四月二十六日の午前十時から、中央テレビの仕事があったんですが、ボクが、迎えに行ったが、マンションから、いなくなっていたんです」
と、マネージャーが、いった。
「その前に、脅迫めいた手紙や、電話は、ありませんでしたか？」
「ありましたよ。でも、人気の出た女性タレントには、たいてい、変な手紙や、電話があるんです。ファンなのか、ストーカーなのか、わからない男も、出てくるんです」
「だが、心配はしていなかった？」

「ええ。具体的な、脅迫は、ありませんでしたから」
と、マネージャーは、いう。
だが、木村ゆきは、殺された。
と、すると、四月二十六日に、何者かに、誘拐されたとみていいだろう。
ただ、犯人は、身代金を要求してはいない。
「これは、間違いありませんか？　警察に、内緒で、犯人に、身代金を払ったということは、ありませんか？」
十津川は、ＮＴプロの社長に、きいた。
「ありません。嘘はついていませんよ」
と、社長は、いった。
と、すると、犯人は、最初から、殺すつもりで、木村ゆきを、誘拐したのか。
十津川は、死体を発見した二人のガードマンに話を聞くことにした。
「最初は、死体が、ぶら下がっていることに、気がつかなかったんですね？」
十津川が、きくと、鈴木が、
「ええ。私たちの仕事は、建設機材が、きちんと、置かれているかどうか、確認することですから」
と、いった。
「携帯に電話があって、上を見たということでしたね？」
「そうです。私の携帯が鳴って、男の声で、何かぶら下がっていると、教えてくれたんです」
鈴木は、自分の携帯電話を、十津川に見せた。
「それは、あなた個人のものですか？」
「いや、Ｒ建設のものです。彼のもそうです」
と、鈴木は、同僚の井上を示した。

「あなたに教えてくれた人は、どうして、携帯の番号を知っていたんでしょうか？」
と、十津川は、きいた。
「さあ、どうしてですかね？　R建設に聞いたんじゃありませんか。今日は、作業は休みで、私たちガードマンしかいませんでしたから、変なものが、ぶら下がっている。それを、現場にいるガードマンに知らせたいといってです」
と、鈴木は、いった。
亀井が、すぐ、R建設の社員に電話のことを、聞いた。
それを、十津川に、報告した。
「確かに、今朝、R建設に、男の声で、問い合せが、あったそうです。建設現場にいるガードマンの携帯の番号を教えてくれとです。当直の社員が、教えたそうです」
「ただ、携帯の番号を教えろといったのか？」
「もちろん、当直の社員は、理由を聞いたそうです。そうしたら、相手は、ガードマンの友人で、どうしても、連絡したいことがあるんだといったといいます。それで、番号を教えたと」
「その時、妙なものが、ぶら下がっているとは、相手はいわなかったんだな？」
「いわなかったそうです」
「なぜかな？」
十津川は、首をかしげた。
「その男は、みんなが騒ぐのを、見たかったんじゃありませんか」
と、亀井は、いった。
「つまり、その男が、木村ゆきを誘拐し、殺害し、鉄骨の上から吊した犯人だというのかね？」

「そこまでは、断定できませんが、親切や、市民の義務で、ガードマンに電話したのでないことは間違いないと思います」
と、亀井は、いった。
「男は、何処かで、騒ぎになるのを見守っていたということだな」
「今も、何処かで、見守っているかも知れません」
「そうだな」
十津川は、周囲を見廻した。
誰かが知らせたのだろう。テレビ局の中継車や、新聞記者が、押しかけてきた。
彼等は、頭上の鉄骨にカメラを向けたものの、そこには、何も、ぶら下がってはいない。
死体は、すでに、司法解剖のために、運び出されてしまっていた。

その中に、中央テレビのカメラマンが、マネキンを持って来て、
「これを、あの二十五階の鉄骨から、逆さに、ぶら下げてくれませんか」
と、R建設の社員の一人に頼んだ。
その社員は、険しい眼つきになって、
「そんなことは出来ませんよ。うちの会社の信用が、傷つきます」
「われわれは、事実を伝えたいんです。一人の若い女性が、殺されて、裸にされて、逆さに吊り下げられたんです。この行為の中に、何が隠されているのか、それを、写真で、人々に、見せたいんですよ。と、いって、まさか、死体を吊せないから、このマネキンを、吊して貰いたいんです。二十五階まで、ボクたちを、エレベーターで、あげてくれれば、ボクたちが、やり

ますよ」
「それは、出来ません」
「どうして？」
「今も、いったように、わが社の信用問題になるからです」
「しかし、死体が、この工事現場に、吊り下げられたことは、事実なんだから」
「事実は、わかっています。それを殊更（ことさら）、センセーショナルに報道することはないでしょう」
「だがね。言葉より、一つの絵の方が、説得力があるんだよ」
「とにかく、駄目です」
　と、中年の社員は、頑固にいった。
「そんなのを、官僚主義っていうんだよ」
「官僚じゃありません。R建設の人間です。会社の名誉を守りたいだけですよ」
「わからずやだな」
　と、カメラマンが、舌打ちしたとき、中継車の中から、
「三浦さん！」
　と、女の声が、呼んだ。
「何んだ？」
「今、テレビ局の方に、面白い絵が、送られてきているそうです」
「面白い絵だって？」
　三浦と呼ばれたカメラマンは、急いで、中継車に、戻った。
　女性のディレクターが、
「局のインターネットに、面白い絵が、送られて来ているんですって」
　と、三浦に、いった。
「それを、ここで見られないか」

「見られる筈だわ」
女は、車内のノートパソコンを、操作して、問題のインターネットに、接続した。
問題の絵が、ゆっくりと、画面に現われてくる。
「これは――」
三浦は、思わず声に出した。
林立する鉄骨、そして、そこに鎖で吊された女の肉体。
少しゆれている。
その光景が、拡大されていく。
女の裸の身体が、大写しになり、乳房から、血が、したたり落ちているのが、はっきりと、わかる。
その映像が、何秒か続いたあと、今度は、R建設の社員三人が、死体を、引きおろすところが、映し出された。
三浦の顔が、紅潮した。
「正午のニュースには、この写真を使おう！」
と、三浦は、叫んだ。

3

正午のテレビニュースが、十津川たちに、衝撃を与えた。
各テレビが、一斉に、高々と吊された木村ゆきの死体を映し出したからである。
午後の捜査会議では、この映像のことが、問題になった。
「調べたところ、何者かが、各テレビ局に、インターネットで、送信したことが、わかりました」
と、十津川は、三上捜査本部長に、説明した。

「送り主は、わかったのか？」
「発信者は特定できませんでした」
「しかし、あれだけの写真を、送れるということで、発信人の想像は、つくんだろう？」
「多分、犯人だと思います」
と、十津川は、いった。
「どんな犯人と、思うかね？」
「一週間前に、犯人は、木村ゆきを誘拐しました。しかし、そのあと、身代金を要求することもなく、突然、彼女を殺して、裸にして、二十五階の鉄骨に、吊り下げました。これをストレートに考えれば、犯人は、殺して、吊すために、木村ゆきを誘拐したと考えられます」
「しかし、犯人の目的は、何なんだ？　若い女を、裸にして、吊し、世間を驚かすのが、目当てと思うかね？」
「今のところ、そう考えられます」
「それでは、木村ゆきでなくても、いいということになるんじゃないか？　それとも、木村ゆきに、個人的な恨みを抱いていたと思うかね？」
「それは、詳しく、捜査してみないと、わかりません」
と、十津川は、慎重に、いった。
「犯人像で、他に何か、感じたことは、あるかね？」
「犯人は、木村ゆきの身体を吊り下げてから、デジカメで、何枚も写し、更に、R建設の社員三人がその死体を下すのを、何処からか、丹念に撮影し、それを、各テレビ局に、インターネットを使って、配信しています。その熱心さは、異常なくらいです」

「だから？」

「犯人は、粘着質で、犯罪については几帳面だと、思っています」

と、十津川は、いった。

捜査会議のあと、十津川は問題点を、一つずつ、あげてみた。

第一は、動機である。

犯人は、何のために、あんなことをしたのか？　何か目的があったのか。それとも、裸の女を、高い鉄骨から吊すこと自体が、目的だったのか。

第二は、被害者のことである。

殺して、吊すのは、若い女なら、誰でも良かったのか。それとも、木村ゆきである必要があったのか。

第三は、犯人が、ひとりか、それとも、複数かということである。

二十五階の高さに、鎖で吊す作業は、大変だから、複数犯ということが、考えられるが、現場には、何台かのクレーンがあったし、エレベーターも動いたから、ひとりでも、可能かも知れない。

どれも、簡単には、答の出ない問題だった。

五月三日の夜になって、司法解剖の結果が、出た。

死亡推定時刻は、五月二日の午後九時から十一時の間。

死因は、のどを、絞められたことによる窒息死である。

他に、腹部と、背中、それに、太股に、青あざが見つかった。皮下出血で、かなり強い力で、殴られたものと、思われる。

「なぜ、内出血するほど、犯人は、被害者を殴ったんだろう？」
それが、十津川には、不思議だった。
どうせ、犯人は、彼女を殺して、高い所に吊す気だったとすると、なぜ、彼女を、殴ったりしたのだろう？
「犯人の性格じゃありませんか」
亀井が、いった。
「サディスティックな性格ということか？」
「そうです。女を痛めつけて喜ぶ奴だと思いますよ」
と、亀井は、いった。

4

十日後の五月十三日、夜。
丸の内消防署では、最新式のハシゴ車を盗まれて、大騒ぎになっていた。
最近の超高層ビルの林立に対応するために、新しく造られたハシゴ車だった。
三十階まで届くといわれていた。
丸の内消防署は、ハシゴ車の盗難について、警察に報告した。
目立つ車だが、なぜか、発見されないままに、深夜を迎えた。
そして、夜明けになった。
十四日の早朝。
北千住（きたせんじゅ）近くの河原に、問題のハシゴ車が、とまっていた。
ハシゴは、最長まで、繰り出されている。
運転席に、人の姿は、なかった。
その代りのように、高く伸びたハシゴの先端から、鎖がたれ下がり、その先に、裸の女の身

体が、逆さに、吊られていた。
髪は、藻のように、風になびき、乳房から、噴き出す血が、風で、飛び散っていた。
最初の発見者は、近くの老人で、朝の散歩に来て、驚き、あわてて、一一〇番した。
十津川たちが、鑑識と一緒に、河原に駆けつけた。
「やられましたね」
と、亀井が、いまいましげに、十津川に、いった。
「同一犯だろうな」
十津川が、頭上を見上げた。その顔に、雨滴がぶつかった。と思ったが、それは、血だった。
長く伸びたハシゴを、たたみ込み、女の死体を、河原におろした。
二十歳前後の若い女だった。
木村ゆきと、全く同じだった。
全裸で、のどを絞められていて、両乳房が、切り裂かれて、血が、噴き出している。
そして、身体のところどころに、内出血の痕。
事態は、第一の事件と、全く同じ形で、進行した。
犯人が、また、インターネットを使い、テレビ各社に、ハシゴ車に吊された女の死体の写真を、送りつけたのだ。
しかも、ご丁寧に、犯人は、ハシゴ車を動かし、ハシゴがするすると伸びて行き、それにつれて、両足を鎖で縛られた死体が、持ち上っていく様子まで、デジカメで撮られていた。
その上、十津川たちが、河原に駆けつけ、ハシゴ車から、死体を引きおろすところも、カメラでとらえている。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。